東京都美術館生みの親



佐藤慶太郎

刊行にあたって

東京都美術館は大正一五年（一九二六）に開館した日本初の公立の美術館です。この美術館は一人の人物の寄付によって生まれました。その人が実業家・佐藤慶太郎です。

リニューアルオープンをきっかけに、美術館の生みの親である佐藤慶太郎を改めてひろく紹介します。

新しくできるラウンジを「佐藤慶太郎記念アートラウンジ」と呼ぶことにし、そこで美術館の歴史を紹介するとともに、佐藤慶太郎の胸像を展示します。

この冊子もその取り組みのひとつです。小学生から大人まで、たくさんの人に読んでいただけるように佐藤慶太郎の生い立ちや活動をまとめました。人のため、世のために力を尽くし、美術館を生んだ一人の人物。東京都美術館の歴史をふくめ、その生涯にふれていただければ幸いです。

なお、この冊子の文章は、筑波大学の齊藤泰嘉教授にお願いしました。齊藤教授はかつてこの美術館に勤め、佐藤慶太郎を知り、その研究に取り組みました。

東京都美術館

目次

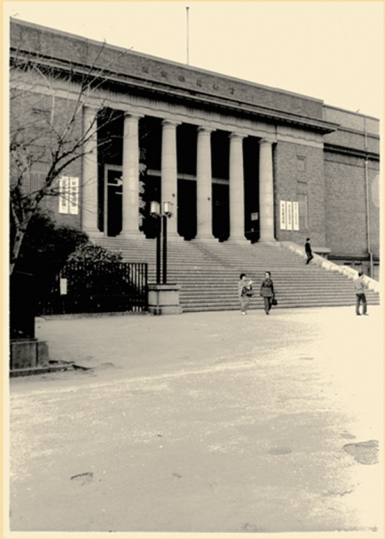
はじめに……2
一　福岡から東京へ……4
二　故郷に帰って―石炭の神様……6
三　美術館の誕生―「時事新報」との出会い……8
四　開館記念展と正木直彦……10
五　「美の殿堂」として……12
六　社会奉仕の人生……14
おわりに……16
佐藤慶太郎年譜　参考文献……17

はじめに

佐藤慶太郎という人を知っていますか。彼は、「東京都美術館生みの親」です。まだ日本に美術館がなかったころ、多くの画家や彫刻家、美術にかかわる人々が、「日本にも世界に誇れる美術館があればいいのに」と思っていました。せっかく絵や彫刻をつくっても、それを発表する晴れの舞台がなかったのです。江戸から明治、大正へと変わった日本。その新しい美術の歩みを世界に知らせる場所がなかったのです。

そうした中で、「このお金を使って美術館を建ててください」と一〇〇万円を東京府（現在の東京都）に寄付した九州出身の石炭商がいました。その人こそ、これから詳しくお話しする佐藤慶太郎という人物です。

なぜ、石炭の仕事をしてきた九州若松（現在の北九州市）の実業家が、東京に美術館が生まれることを望んだのでしょうか。皆さんも私といっしょに佐藤慶太郎の人生をたどり、そのことについてぜひ考えてみてください。



東京都美術館 旧館外観

一

福岡から東京へ

佐藤慶太郎は、明治元年（一八六八）一〇月九日に筑前国遠賀郡（現在の福岡県北九州市）に父孔作、母なをの長男として生まれました。佐藤家の祖先は、源義経の四天王のひとり、佐藤継信であると言われています。慶太郎の四代前の祖先、江戸時代に大庄屋をつとめた佐藤信英は、「一族はもちろん、他人なりとも親切をつくし、少しもかざりがましく不実なことすべからず」という信念から凶作のときに数多くの飢えた農民を救いました。

家は貧しかったのですが、慶太郎は勉学の志が高く、親戚から奨学金を出してもらい、福岡県立英語専修修猷館に入学しました。この学校では、数学も歴史も授業はすべて英語で行われていました。彼は、それまで英語を習ったことがないので必死に勉強し、英語を身につけました。その後、慶太郎は青雲の志に燃えて上京します。明治法律学校（現在の明治大学）に入学し、法律を学んで卒業。しかし、東京で病気がちであった彼には就職する道も開けず、仕方なく、ふるさと九州に帰ったのです。



福岡県立英語専修修猷館在学時代の佐藤慶太郎



佐藤慶太郎が少年時代を過ごした家



明治法律学校在学時代の佐藤慶太郎（後列左端）

二

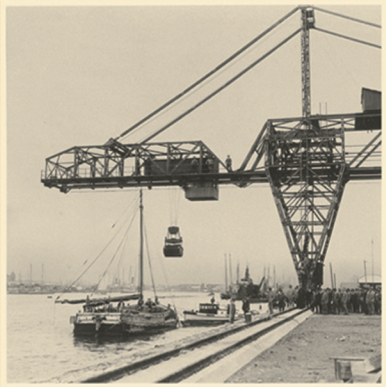
故郷に帰って―石炭の神様

失意の帰郷。しかし、故郷はあたたかく迎えてくれました。まわりからの勧めもあって、彼は若松港の山本周太郎商店という石炭商の店に就職し、周太郎の妻の妹である山本俊子と結婚しました。慶太郎は、新婚の夜に「自分は楽をしようとは思わない。お前さえ僕を信じてくれるなら必ず大成してみせる」と俊子に誓います。「働くのは給料のためではない、信用という無形の財産を築くためだ」という信念のもと、妻に簿記など商売の「いろは」を学びました。

慶太郎は地底の採掘現場にも行って石炭の研究を熱心に行ない、黒く光る石炭のひとかけらを見ただけで、それが筑豊のどの炭鉱から掘り出されたかをぴたりと当てることができるようになりました。門司港では外国客船への石炭積み込み作業を陣頭指揮し、海に落ちて大けがをしたこともあります。関門海峡の風と潮の向きを読んで石炭運搬船（帆かけ船）を位置決めし、源平合戦さながら命がけの作業をしました。彼は「石炭の神様」と呼ばれるようになり、若松港を舞台にした火野葦平『花と龍』という小説には実名で登場します。



佐藤慶太郎の妻俊子



若松港の石炭船

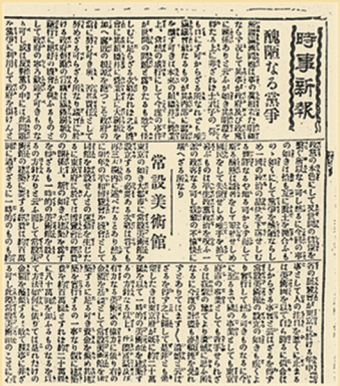
三

美術館の誕生―「時事新報」との出会い

「若松の佐藤なら（＝信用できる）」という言葉が生まれるほど取引相手に信頼され、炭鉱経営にも成功した慶太郎。しかし、胃腸が弱いというのが唯一の泣き所でした。主治医の野口雄三郎博士から事業をやめないと命の保証はできないと言われ、会社経営ではなく社会奉仕に生きようと決意します。

そんなとき大正一〇年（一九二一）、東京で泊った木挽町水明館という宿で新聞『時事新報』の社説「常設美術館」を偶然目にします。それは「西洋諸国の大都市にはその国の文化芸術を代表する常設美術館があるが、日本には博覧会ごとに建てる仮設の美術館しかない。日本国民は美術の手腕に富むが、油断していては西洋諸国に遅れをとってしまう。心ある人の寄付金を募って美術館を建てよう」という内容でした。たとえば、英国のロンドンには、砂糖王ヘンリー・テートの寄付でできたテート・ギャラリーがすでにありました。

この記事を読んだ慶太郎は、東京府庁に阿部浩府知事（今の東京都知事）を訪ね、知事に美術館建設費一〇〇万円（現在の約三三億円）の寄付を申し出るのです。


時事新報

醜陋なる常爭

常設美術館

『時事新報』の社説「常設美術館」（部分）


テート・ギャラリー（ロンドン）

四

開館記念展と正木直彦

美術館建設は明治の頃からの美術関係者の夢でした。国や東京府に訴えてきましたが、なかなか実現しませんでした。佐藤慶太郎の寄付で、岡田信一郎の設計による東京府美術館が開館したのは、大正一五年（一九二六）五月一日、新緑薫る上野公園でのことでした。その三年前に起きた関東大震災。この美術館は、東京復興の光の一つとなり、やがて「上野の美術館」として日本中の人に愛される美術館に育ってゆきます。ここを舞台に新しい日本の文化が花を咲かせることになるのです。東京府美術館生みの親、佐藤慶太郎の播いた一粒の種が、大きな樹となり、森となり、日本の美術界の今があるのです。

「日本最初の美術館における最初の展覧会」は東京府後援のもと開かれた「聖徳太子奉讃美術展」です。日本を代表する日本画家、西洋画家、彫刻家、工芸家たちが大同団結し、新作約一、〇〇〇点が並びました。展覧会企画の中心は、東京美術学校長正木直彦でした。「和」を説く聖徳太子の精神に深く共感していた彼は「東京府美術館育ての親」になりました。



東京府美術館 工芸陳列室



藤島武二《芳恵》
（西洋画、聖徳太子奉讃美術展出品）



東京美術学校 第五代校長
正木直彦

五

「美の殿堂」として

開館以降二〇年間で七〇〇回を超える展覧会が開かれ、一、二〇〇万人もの入場者を迎えた東京府美術館［昭和一八年（一九四三）から東京都美術館］。主に美術団体展（帝展、院展、二科展など）の新作発表の場でしたが、館の主催で「大原孫三郎蒐集泰西美術展」を開き、エジプト、スペイン、フランスなどの美術を紹介しました。新聞社による企画展「明治大正名作展」では和田三造《南風》、横山大観《生々流転》、荻原守衛《女》など近代日本美術の傑作が並び、「日本名宝展」では《鳥獣戯画》、俵屋宗達《風神雷神像》、尾形光琳《紅白梅》など門外不出の絵が初公開されました。日仏芸術社（代表、デルスニス、黒田鵬心）の手でロダン《考える人》（現、京都国立博物館蔵）、フレミエ《ジャンヌ・ダルク騎馬像》もパリから運ばれ、東京府美術館に展示されました。現在、東京都美術館ロビーを飾るベルナール《ダンス》は日仏芸術社寄贈です。「日独伊親善図画展」では全国の子どもたちの作品が並び、九日間の会期で七七万人もの入場者を数えました。



大原孫三郎蒐集泰西美術展会場風景 昭和3年（1928）



ロダン《考える人》
第6回仏蘭西現代美術展 昭和2年（1927）



ジョゼフ=アントワーヌ・ベルナール《舞踊》

六

社会奉仕の人生

胃腸病に苦しんでいた慶太郎は、五七歳のとき東京帝大二木謙三医学博士に勧められ、徹底した咀嚼（ご飯をよく噛んで食べること）を実践し、体調が回復。以後、日本人の健康増進運動に邁進します。彼は、愛する日本が力づくで危機を突破しようとするのを憂い、「早飯は好戦的人間や自殺願望の人間を生む。ご飯はよく噛んで食べよう」と軍人相手に熱く説きました。

食生活の重要さに目覚めた彼は農村青年が学ぶ福岡農士学校建設に奔走。昭和一二年（一九三七）には佐藤新興生活館本部ビル（ヴォーリズ設計、神田駿河台、母校明治大学そば、現在の山の上ホテル）を建設し、「生活訓練所」を設けて、女子教育に尽力します。

社会貢献に力を尽くした慶太郎は昭和一五年（一九四〇）一月一三日には別府で亡くなります。彼の遺志をひきつぎ、その寄付により別府市美術館や別府市体育館ができました。昭和二八年（一九五三）、東京都美術館は、恩人の名を後世に伝えるため、新たにつくられた展示室に「佐藤記念室」と名付けました。



佐藤新興生活館本部ビル



佐藤新興生活館での体操風景



佐藤記念室（戦後）



佐藤慶太郎による揮毫《公私一如》

佐藤慶太郎年譜

明治元年（1868）		10月9日、筑前国遠賀郡陣原村（後に折尾町、現北九州市八幡西区陣原）に父孔作、母なをの長男として生まれる。
明治19年（1886）	18歳	福岡県立英語専修修猷館（現福岡県立修猷館高等学校）に入学。
明治20年（1887）	19歳	修猷館を中退して上京。明治法律学校（現明治大学）に入学。
明治23年（1890）	22歳	明治法律学校を卒業するが、病弱のために帰郷。
明治25年（1892）	24歳	洞海湾の港町若松で石炭商山本周太郎商店の店員となり、 山本の妻の妹、山本俊子と結婚。山本姓を名乗る。（後に佐藤姓に復帰）。 明治33年に独立し、自分の店を構える。
明治41年（1908）	40歳	日露戦争後の石炭需要急増を背景に炭鉱経営に乗り出す。 明治43年には高江炭鉱を貝島から買収する。従業員千人。 坑夫の賃金の安い石炭不況時に坑道を掘り進めておき、 好況時に一気に掘出して販売するなど、事業を発展させる。
大正7年（1918）	50歳	若松市会議長となる。
大正9年（1920）	52歳	この頃、経営の第一線からの引退を決意する。 事業を整理し、これまで築いた財産を社会奉仕に使うことにする。
大正10年（1921）	53歳	東京木挽町の宿、水明館で美術館建設を訴える時事新報社説を目にする。 旧知の東京府知事阿部浩に面会し、美術館建設費用百万円寄付を申し出る。
大正15年（1926）	58歳	5月1日東京府美術館（上野公園）が開館。 勲三等瑞宝章を受ける。落成式で帝展、院展、春陽展、二科展の画家達の描いた画帖や朝倉文夫作の佐藤慶太郎の胸像彫刻等の記念品目録を送られる。 開館記念展第一回聖徳太子奉讃美術展覧会開催。
昭和6年（1931）	63歳	日本貿易振興会主催による世界一周実業視察団に参加し、 米国、欧州、中東、アジアを歴訪。
昭和12年（1937）	69歳	神田駿河台に佐藤新興生活館のビル（現山の上ホテル）が落成。 食生活改善運動や、農村を担う青年や女子の教育に尽力する。
昭和15年（1940）	71歳	1月13日、急性肺炎のため自宅のある別府にて死去。

参考文献

- 佐藤慶太郎「慶太郎自叙伝」「生活」、昭和14年（1939）11月号―昭和15年（1940）4月号、佐藤新興生活館
- 佐藤慶太郎翁伝記編纂会代表横田章「佐藤慶太郎」、昭和17年（1942）、大日本生活協会（執筆担当者加藤善徳）
- 齊藤泰嘉「佐藤慶太郎伝―東京府美術館を建てた石炭の神様」、平成20年（2008）、石風社

おわりに

佐藤慶太郎の座右の銘は、「公私一如」という言葉です。自分の財産は、社会からの預かりものであり、世の中にお返しするのは当たり前のことだと彼は考え、そして実行しました。それは、アメリカの鉄鋼王にして篤志家のアンドリュー・カーネギーを尊敬していた佐藤慶太郎の信念と行動でした。

最後に佐藤慶太郎自身の言葉を紹介して、締めくくりとします。

＊＊＊＊＊

私は若い時から、眼前に直面した事柄に、精いっぱい、有りったけの誠と、力をつくして当ってきた。従ってその結果については、一切取越苦労や、愚痴・後悔は言わぬことにしている。今の言葉で云えば、現状充実主義と云うのであろうか。実は、こんな主義を立てても立てなくても、人間に与えられた道、我々のつくすべき方法は、ただ『現在に最善を尽くす』之以外にないのではなかろうか。

今日と云う一日の外はなかりけり　昨日は過ぎつ　明日は知られず

［「生活」昭和一四年（一九三九）一〇月号より］

著者：齊藤泰嘉（さいとう・やすよし）
筑波大学芸術系教授（芸術支援学研究室）

発行者：東京都美術館　発行日：平成二四年（二〇一二）四月一六日

東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

designed by ALL RIGHT GRAPHICS